

近代日本の教育とキリスト教 (5)

明治初期・欧化主義の時代におけるキリスト教女子教育

平沢 信康*

Christianity in Modern Japanese Education (5)

— Christian Women's Education in the Early Westernized Years of the Meiji Era in Japan —

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

During the Edo era (for about two and a half centuries) the Tokugawa shogunate carried out a policy that prohibited Christian belief. During the Meiji Restoration, Japan became a modern nation state, and the national unity was realized.

However, the new Meiji government continued to follow the policy of suppressing Christians.

But the protests of Western countries were strong, and the Japanese government was forced to deregulate. Soon after the Meiji Restoration, in February 1873, the prohibition was abolished. Since then, more missionaries were sent by Christian sects from Western countries to Japan, eager to propagate Christianity.

Christianity became active in various areas of Japanese life. One of the important contribution was in the field of education. Both missionaries (mainly from America) and Japanese believers began to found many secondary schools and worked as educators.

Some missionaries were interested in women's education. Generally they taught Japanese girls English and science. Some of them inspired Japanese young ladies with their virtue. Christianity has taken a large role in women's education.

This paper describes the educational activities of Christians, especially the foundation of private schools for girls in the westernized (called 'oukashugi') days (1873-1880). Later, some of them developed into famous colleges or universities.

KEY WORDS: *Modern Japanese Education, Christianity, Educational Cultural Exchange*

1 はじめに

本稿は、前稿において紙数の関係で割愛せざる

をえなかった、明治初期におけるキリスト教主義の女子教育について検討するものである。対象時期は、前稿同様にほぼ、禁教の高札が撤去された

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

1873年から、儒教主義が教育政策のなかに復活して登場する1880年までとする。

明治維新後、日本社会には一部に保守的な思潮もあったが、開化的思潮が隆昌の一途をたどった。知識人の間においても、一般庶民のあいだにおいても、「文明開化」謳歌の気運は次第にいかんともしがたい勢いとなっていた。新聞が発刊され、西洋館が建てられ、洋服・洋食・ガス燈など、洋風の生活文化が登場した。知識人の間では、森有礼の発起により明六社が結成され、旧幕系洋学者たちが参加して文化的啓蒙をはかった。

こうした欧化主義の高揚は、キリスト教の日本社会への浸透とも無関係ではなかった。

1872(明治5)年においては、来日ミッション数は7であったが、5年後には倍増し、この間、在日宣教師数は28人から99人へと増えた¹⁾。教会の展開も好調であり、その活動は活発で、日本の社会に新鮮な息吹を与えた。72年当時、たった1つの教会に日本人教会員16人しかいなかったものが、教勢が上昇して、1879(明治12)年には教会数64、日本人教会員数2701へと急増している²⁾。

西洋の文物がすべて啓蒙的なものとして歓迎され、西欧世界への憧憬や好奇心が高まるなかで設立されたキリスト教系の学校は、日本の近代史・近代教育史においてパイオニアの役割を果たし、日本社会の開化に少なからぬ影響を及ぼした。迷信行為や官尊民卑・階級観念・女性差別を中心とする封建的儒教的思考の打破、西洋文明や近代的知識の普及、酒色などで乱れた生活の浄化、キリスト教ヒューマニズムの精神の普及などがそれである。

キリスト教が日本女性の教育と生活に与えた影響もまた小さいものではなかった。当時、日本における女子教育は、封建的な男尊女卑の思潮のもとで低調であり、男子よりもレベルの低い女子特有の教育が施されていた。また、女子には学問・教育は不要であるという意見も、まみられるところであった。わが国の女子教育に関しては、男子の教育に対して一線を画す思想と実践が多年にわたってくりひろげられてきた。

こうした「伝統」に対する反省があつてか、明

治初期には、女子教育の重要性に着目した施策も見られた。1871年11月、欧米視察に加えて条約改正の使命を帯びた特命全権大使・岩倉具視ひきいる岩倉使節団一行に、北海道開拓使派遣の留学生として、山川捨松・永井繁子ら5人の少女が加えられ、アメリカに送られた事実は、その注目すべき一例である。この女子の留学生派遣は、おそらく開拓使次官の黒田清隆がアメリカで見た女性の社会的地位の高さと女子教育の進歩が一つの刺激となったものであろうと、石附実氏は推測している³⁾。そのうちの最年少者・津田仙の娘むめは米国滞在中のほとんどをジョージタウンで過ごし、小学校と女学校の課程を修め、73年7月、フィラデルフィアの西北ブリッジポートのオールド・スウィズ教会において、ランソン夫妻に伴われて聖公会牧師ペリンチーフ Perinchief, Octavius から受洗した。のち、女子英学塾を設立した津田梅子である。

新政府は、1872(明治5)年の「学制」発布によって、男女の別なく就学することを、国民に宣言し勧告した。また、同年2月、国立の女学校として東京女学校(神田)を、同年9月、開拓使学校の付置女学校(東京芝増上寺境内)を、3年後には東京女子師範学校(神田)を設立した。このほか、72年4月には、京都府によって新英学校と女紅場(のちの京都府立女学校)が開設された。当時の女子教育に対する当局の積極性がある程度うかがえよう。

しかし、文部省設置の東京女学校は、生徒数38名(73年)という小規模なものにすぎず、最初の学科内容も当時の小学校の教科に英語を加えた程度のものであった。75年にその規則を改めて中学校程度とし、そのレベルはかなり高いものがあったが、その2年後には政府の財政緊縮の必要に迫られて廃校となった。それは、せっかく芽生えかけた国側の教養主義的な女子教育の後退を示すものであった。また、芝に設立された女学校も、札幌に移され、その後76年には廃校の悲運に見舞われている。政府当局がいかん女子中等教育に対して関心が薄かったかを如実に示している。京都府が設立した学校にしても、学科目としては、英語、

礼儀作法、押し絵、細工物、茶道、華道、絵画、習字、裁縫が教えられていたようで、女子に求められていた教養のありようがおよそ察せられよう⁴⁾。

このように、政府の取り組みには限界があった。わが国の女子教育については、学制において、小学教育は男子と同等とされたものの、それ以上の学校は女子師範学校を除けば設置されなかった。私学としては3年後に東京に設立された跡見女学校があるのみであった。1879年、いわゆる自由教育令において、小学校を除き男女が教場を同じくすることが禁じられた。男女それぞれに平等な中・高等教育を用意するのではなく、その教育から女子を排除するという方針に他ならなかった。少なくとも女子については、中等教育以上がはなはだしく軽視され、規定が不備であった。

そうした状況のなかで、女子教育に力を入れたのがキリスト教徒であった⁵⁾。

キリスト教禁制の高札が撤去されて以降、各地にキリスト教主義の女学校が、主としてミッション・スクールとして設立されていった。すでにフェリス女学院の前身をなす私塾がスタートしていたのをはじめ、全国にミッション系の英語塾が生まれ、女子教育の発展に寄与した。

キリスト教系女学校のルーツのなかで、最も古いのが1870（明治2）年に横浜に設立されたフェリス女学校であり、これに続いて翌年、横浜共立学園が設立され、74年に青山女学院、75年に神戸女学院、77年に立教女学校と同志社女学校が生まれ、次々と女学校が誕生した。明治期において、キリスト教がわが国の女子教育について果たした貢献には大きなものがあった。

こうして、明治初期、日本における近代的女子教育が着手されたが、それは主としてプロテスタント・キリスト教の婦人宣教師によるものであった。キリスト教に基づく人格主義に立ち、キリスト教教育および英語教育を通じて欧米の先進文化を伝えるとともに、西欧近代の人間観・女性観を日本女性に訴えた。これらの学校から、優れた女子教育者をはじめ、社会事業、矯風運動、婦人解放運動の開拓者が多数輩出した。婦人宣教師を創

立者とする、いわゆるミッション系私立女子校は今日に至るまでも健在であり、その一部は大学を擁して日本の女子教育に一定の影響力を保持していることは周知の事実である。

2 外国人宣教師による女学校の創設

各宣教会は、男子の教育に劣らず女子のための教育に力をいれ、多くの女学校を設立した。いずれも、最初はきわめて小規模な私塾ないしは家塾のかたちで開設され、次第に生徒数の増加をみるにおよんで学校の形態をとるようになった。欧米崇拜の風潮が強まりつつあった当時、進取の気象をもった一部の好学の日本女性たちが、きそってこれらの学校に集った。

以下、各教派について、やや詳しくみていきたい。

I プロテスタント各派

1) アメリカ・オランダ改革派教会

フェリス女学院の創立は、1870年9月21日、横浜居留地3番地のヘボン塾におけるキダーの教育事業を以てするとされている⁶⁾。

キダー Kidder, Mary Eddy 1834. 1. 31-1910. 6. 25は、ヴァーモント州ウィンダム郡の寒村ワーズボロの農家に生まれた。父親は自営農民であり、彼女は7人の兄弟姉妹の4番目であった。祖先はイギリス南部からマサチューセッツ州に移住したピューリタンである。祖母が教育熱心であったためか、間断をおきながらも勉学を続けた。地元の小学校を卒業した後、1850年から1年ほどリランド・セミナリーに学び、その後サックストーンズ・リヴァー・セミナリーに学び、20歳を過ぎてからマサチューセッツ州の名門モンソン・アカデミーに2年間学んだ。すでに10代で回心し、会衆派の教会員となっていたが、モンソンで同校卒業生のブラウンと出会ったことが彼女と海外伝道の接点となった。ブラウンがサンドビーチ教会の牧師をしていた頃の教会員であった。卒業後、ニューヨーク州オーバンでブラウンの学校を助け、1859年にブラウンが来日する際には、共に教会活動を行った2人の女性が献身して一緒に出発するのを

ニューヨーク港に見送った。60年代にはマンハッタン近郊のニュージャージーおよびブルックリンで教務にたずさわり、同時にブルックリンのワレン・ストリート・ミッションに参加、都市化と貧困の問題に取り組む福音主義キリスト教の一大運動の一端に加わった。ここでの経験が、宣教師としての実質的な訓練となった⁷⁾。

19世紀前半にアメリカ人による海外伝道が始まった頃から宣教師の男女比は拮抗していた。1870年以降、各派の婦人伝道局の活動が活発化し、独身女性が盛んに送り出されるようになり、婦人宣教師の割合は急増していった。1869年夏、35歳のキダーは、再来日するブラウン夫妻に伴われて故国アメリカを後にした。ブラウンには男女を区別せずに能力を評価するリベラルなところがあったようである。アメリカ・オランダ改革派教会から送られた彼女は、日本に派遣された最初の独身の婦人宣教師であった。

ヘボン夫人が経営していた男女共学の塾を引き継いだ彼女は、まもなく女子部を分離独立させて、フェリス女学院の基礎を築いていた。初めは、14-17歳が7名、8-10歳が5名の小さな私塾にすぎなかった。最年長はヘボン塾以来の生徒である奥野昌綱の娘久子（72年夏に受洗）であり、最年少はのちの若松賤子である大川かしで、女中が付き添って登校し勉強も一緒にする幼さであった。1年後、生徒数30名に増えた「キダーさんの学校」は、72年9月、当時の神奈川県令・大江卓の協力、居留地外にある伊勢山の県庁官舎の一つに移転した。文明開花の時代でもあり、この日本家屋で、大江夫人をはじめ高官夫人、貿易商人までが生徒となって授業をうけた。

キダーは、プリンストン大学出身で長老派伝道局から派遣されたローゼイ・ミラー、E. R. と、73年7月10日に結婚する。ミラーは資産家の名門出身の人で、キダーより10歳若かった。このとき日本人はキリスト教式の結婚式を初めて見たといわれ、生徒たちのほとんど全員が贈り物を持って喜んで式に列席した。異なる伝道局の宣教師と結婚する場合、男性の所属伝道局に女性が転籍するのが普通であったが、このカップルは逆で、それ

は異例なケースであった。改革派に転じた夫は学校経営に協力した。その後、現住地の中区山手178番に土地を得て、校舎と寄宿舎を建てることができ、75年6月1日、フェリス・セミナリー Ferris Seminary を開校した。独身の婦人宣教師 ウィトベックが主に教務を担当し、ミラー夫人が主に寄宿生の生活指導にあたった。

翌年、フェリス女学校と称することが決定された。校名は、アメリカ・オランダ改革派教会の外国伝道局総主事フェリス父子を記念したものである。父アイザック・フェリスは、外国伝道局の創設に貢献し、初代総主事として、インド、中国、日本の宣教を推進した人物である。その息子ジョン・M. フェリスは、第3代総主事として、日本宣教に尽力しただけでなく、多数の留学生を世話し、御雇外国人を紹介するなど、日本の教育と近代化の功労者である。キダーら教師を派遣し、草創期の学校を物心両面から育て支えたのも彼である⁸⁾。

山手に開校された時点から、従来の英学中心のカリキュラムに和漢学が加えられ、午前がアメリカ人教師による英語諸学、午後が日本人教師による和漢学と分けられた。寄宿舎も畳敷で、寝具、衣服、食事、坐臥の動作など日本の生活習慣が配慮された。生徒たちを「自分達の家庭で生活できないように教育するのは賢明なことではなく、またそうするのは少し危険である」とキダーは考えたからである。

のちに婦人運動家となる佐々木豊寿1853. 5. 6-1901. 6. 15は、ここに学んだ一人である。彼女は、伊達藩の儒者・星雄記の子として仙台に生まれ、幼名を艶といった。姉（相馬黒光の母）のほか兄弟は皆夭折したが、彼女は和漢洋の学問を修めることができた。21歳の頃、母と徒歩で上京し、キダーの塾に学んでキリスト教にふれ、人格の尊厳・平等、男女同権、一夫一婦の理念などの思想を養った⁹⁾。彼女の娘の信子は国木田独歩との恋愛事件で知られた。

紀伊国日高郡南部町に生まれた植村季野1858. 9. 11-1930. 6. 7は、和歌山で漢学塾に学び、ついで横浜に出てフェリス女学校で漢学を教えなが

ら英語を学んだ。家は代々酒蔵業を営む庄屋で、神官も務めていた。山内量平の妹にあたる。この頃キリスト教にふれ、77年5月27日、横浜海岸教会で、ミラーから受洗した。

若松賤子1864. 3. 1-96. 2. 10もまた、キダールの英語塾に入学した女性の一人である。岩代国会津郡若松阿弥陀町に生まれた彼女は、会津藩士の長女で、本名を島田嘉志子といったが、一家離散のため、70年に大川甚兵衛の養女となり横浜へ移った。75年、フェリス・セミナリー開校とともに、その寄宿生となり、恩師キダールを母として育った。77年、横浜海岸教会でミラーから受洗し、山内（植村）季野とともに日曜学校の教師を務めた。のちに児童文学者・評論家、日本最初のキリスト教文学者となり、バーネットの『小公子』を翻訳したことで有名である¹⁰⁾。言文一致体の最初期の実践者、明治女学校の校長・巖本善治の妻としても知られている。

キダールは79年に帰米し、2年間恩賜休暇を過ごした後、81年に再び来日しているが、フェリス女学校を辞し、夫とともに伝道に従事する道を選択した。

長崎では、スタウトが東山手の居宅で英語や聖書を、夫人が女子に裁縫や編み物などを教えていた。生徒が増えたため市中に出たが、制札が撤去された後でも聖書を教えることは市民には受け入れられず、誤解を生じたので、再び東山手の私宅で希望者に聖書を教えた。73年夏にはその住宅の隣に15坪の教会が建ち、それが学校としても使われたが、夫人が健康を害したため学校は閉鎖のやむなきに至った。

76年、改革派の婦人伝道局は、スタウト夫妻の願いを容れて、伝道局創立百年を記念してフェリスに並ぶ学校を作ることと、2人の婦人宣教師を派遣することを決議して、五千ドルの募金を開始した。翌年には目標の半ばを超えたので、この募金に貢献した人の名をとってスターダス・セミナリーを作ることになったが、教師が得られるまで校舎の建築は延期された。ニューヨークの改革派教会員ファーリントン姉妹が志願し、派遣されて78年に長崎に着き、閉鎖された学校が再開された。

生徒は6名であった。しかし、わずか5ヵ月後、姉が病み、姉妹は横浜での治療を求め、ついに帰国してしまった。スタウト夫妻もほとんど時を同じくして賜暇帰米することとなり、のちの梅香崎女学校は、いまだ軌道に乗ることはなかった。

2) アメリカ長老教会

長老派では旧来の神奈川（横浜）の伝道拠点に加えて、維新後に開かれた築地居留地に進出することを決定し、新任のクリストファー・カラゾルス夫妻がその任に当たった。

カラゾルス夫妻は1869年に築地で塾を始めたが、翌年、女子教育のために妻ジュリアが英学塾のA6番女学校を開設していた。一橋家家臣本多家の娘・出口せいが、夫と死別後、カラゾルス夫妻を頼って求道生活を始め、和漢の素養があったことから6番館に寄宿して、この学校で教えた。ジュリアは教えるに熱心であり、73年頃には寄宿生が10人、通学生はそれより多く、生徒のほとんどが上流階級の娘であった。

73年、アメリカ長老教会婦人伝道局から、3人の独身女性が日本に派遣されてきた。パーク Parke, Mary C. (のちのタムソン夫人 Mrs. Thompson) とヤングマン Youngmann, Kate. M. 1841. 12. 17-1910. 9. 29, および A. M. ガンプルである。当初は、ジュリアの教育事業を援助するためであった。ところが、彼女たちとカラゾルス夫妻とは確執が生まれ、またカラゾルスの人格的問題に起因するトラブルもあって、協力関係は築かれなかった。やがてB6番館のヤングマンのもとに生徒がつくようになった。こうして、隣接地に同じ教派の婦人宣教師が別に女学校を開設する事態を迎える。彼女たちは、翌年、築地居留地に設立されていたA6番女学校の隣りにグラハム・セミナリー（B6番女学校）を開設した。そのため、両者は競合し、ほどなくカラゾルスの辞任とともに前者は廃止されることとなる。

76年、A6番女学校は閉校となったため、生徒の多くはB6番女学校に、一部はジュリアと共に原女学校に移った。B6番女学校はA6番の生徒の一部を引き継ぎ、同年、築地新栄町42番に新校

舎を建て、10月24日、正式に政府の認可を受けて新栄女学校と改称した。やがて、この学校は女子学院につながっていく¹¹⁾。

のちに女子教育家・社会改良家、とくに矯風会会頭を長年務めて婦人矯風事業の指導者として有名になる矢島楫子 1833. 6. 11-1925. 6. 16 が、78年に新栄女学校の教諭兼舎監として招聘されている。彼女は熊本県の名家の出身で、徳富蘇峰・蘆花兄弟の叔母であり、その長女・竹崎順子は熊本女学校長として郷党の子女の教育にあたり、さらに横井小楠の妻つせ子は彼女の姉であった。明治元年、35歳のときに離婚して生家に戻ったが、生来の向学の精神やみがたく、72年に上京して東京に新設された東京府教員伝習所に40歳で一生徒として入所、一年余の在学で教員の資格を得、翌年、芝区桜川小学校に奉職した。その後、45歳を過ぎてトゥルー夫人と出会い、その才能を見出されて築地に赴任することとなった。長老派の新栄教会で、79年トムスンから受洗した¹²⁾。

3) アメリカ聖公会

かねてから女子教育の構想を抱いていたウィリアムズ主教によって、77年9月1日、東京に立教女学校が創設された。

この学校は、ウィリアムズ主教の宣教活動を助ける有力な協力者であったブランシェーが、妻と共に仮住居としていた神田明神下(現・文京区湯島)の民家の一室に開設された。最初の生徒は6名であった。居留地を出るには日本人の名義が必要であったが、その場所の名義人となっていた若山儀一が設立に際して校主として参加した。

若山は緒方洪庵の適塾に学び、さらに、長崎に遊学して医学と蘭学を学び、ウィリアムズと知己の間柄になっていた。その後、官途につき、一時開成所の教官を命ぜられ、この間、フルベッキについて経済学を学んだ。岩倉使節に随行して渡米し、アメリカに滞在して税務・国家経済を調べ、帰国後、大蔵省、農商務省、参事院議官補などの官界にあった。財政、税制、貿易などに関する著書をはじめ、訳書や建白書など多数をものした人物である。

アメリカ・メイン州出身のブランシェー Blanchet, Clement T. 1845. 4. 25-1928. 1. 23 は、オレゴン州教区で活躍したカトリック大主教を父にもち、一族にカトリック聖職者が多い。イリノイ州セント・ソーヴァー大学およびシカゴのイマヌエル・ホール大学を卒業し、73年に来日した。翌年2月、主教が築地居留地内に開設した男子校の校長に任命されたのは前稿のとおりである。5月には主教から司祭按手を受けた。77年4月、アメリカ人婦人一致伝道協会から派遣されて横浜のミッション・ホームで伝道師として働いていたモルトビー Maultby, Annie B. N. と結婚した。これを契機に、主教によってブランシェーは立教女学校の校長にも任命されたが、司牧などの宣教活動に多忙であり、学校の実務の大半を妻に任せるほかなかった。彼女の働きがこの学校の創設と発展の原動力となった¹³⁾。

大阪での伝道を女子教育の面から助けるため、1874年末、アメリカ聖公会から婦人教師エディ Eddy, Ellen G. が派遣された。翌年初めから先任者クインビー, J. H. 夫人が教えていた3名の生徒を引き受け、大阪居留地6番で女子教育を始めた。当初「エディの学校」と呼ばれたが、のちに照暗女学校 St. Agnes' School となった。寄宿制の女学校で、6-15歳の女子が主であったが、通学生のなかには男子も数名いた。現在の平安女学院である。脱落して退校する生徒が絶えなかったが、彼女は子どもや親を説得し、母国へ奨学金のためのアピールを書くなど、一人ひとりに将来の望みをもたせようと、身を挺して教育にあたった。80年5月には2名の生徒が初めての受洗者となった¹⁴⁾。

4) イギリス教会宣教会 (CMS)

この会の日本伝道に伴い、オックスラッド Oxlad, Mary Jane が、大阪居留地の自宅で、少年2, 3名を含む14名の女塾を開設した。イギリスのウェールズ南部のニースに生まれた彼女は、1864年から東洋女子教育振興協会(1834年設立)に所属して香港で奉職していた。1877年に来日し、79年6月、3名の寄宿生と11名の通学生を以て女子教育を開始した。これがのちに永生女学校となる¹⁵⁾。

5) アメリカ・バプテスト教会

バプテスト・ミッションの女学校がこの時期に生まれている。東京駿河台の森有礼宅に居住していたアーサーが、1875年、同地に新築された西洋館に移って女子教育を始めたのが前身である。

アメリカのバプテスト教会宣教師アーサー Arthur, James Hope 1842-77 は、コネティカット州ハートフォードに生まれ、18歳で軍隊に入り、プラスキ要塞攻略に参加、負傷して捕虜となり、リッピー牢獄に収容された。この時に彼は召命を感じ、帰国後の1863年12月受浸した。さらにブラウン大学、ニュートン神学校を卒業し、按手札を受けて日本派遣宣教師に任命され、73年に来日した。横浜で外国人専門病院を訪問し、寄港した船員たちに福音を伝えていた。

翌74年、東京に移り、森有礼邸内の西洋館を借りて女子教育を開始した。アーサーは、森に雇用されて女学校教師となるという形式をとったため、居留地以外の駿河台に住むことが出来た。しかし、健康が優れず、75年に来日したキダーに学校運営を任せることとなった。

1871年に組織された婦人バプテスト外国伝道協会は、多くのすぐれた宣教師を派遣した。アメリカ・バプテスト教会婦人宣教師のキダーも、そのなかの一人であった。キダー Kidder, Anna H. 1840-1913. 11. 23 は、アメリカ・ニューハンブシャー州アーモストに生まれ、バーモント州のカレドニア・アカデミーで教育を受け、ロードアイランド州プロヴィデンスの黒人孤児院で数年間教育に従事した経歴の持ち主である。初めは会衆派であったが、バプテスト派に転じ、アフリカ伝道を志すが許されず、日本に変更して、1875（明治8）年11月1日、横浜に到着した。

アーサーが始めていた女学校の経営を全面的に任され、彼女の学校は、英和女学校または喜田英和女学校とよばれた¹⁶⁾。この学校は、その初期には、森有礼をはじめ、高田早苗、平岩愼保、石井菊次郎、青木周蔵、田村七太らの妻たちが学び、程度の高い女学校として評価されていた¹⁷⁾。のちの駿台英和女学校である。

6) アメリカ・メソジスト監督教会

同教会の婦人宣教会 Woman's Foreign Missionary Society から、ニューヨーク州生まれの婦人宣教師スクーンメイカー Schoonmaker, Dora E. 1851. 1. 14-1934. 12.5 が派遣され、青山学院の源流の1つをなす築地の海岸女学校を創設した。

この教派からは、彼女よりも早く、メリランド州プールスヴィル生まれのソーパー Soper, Julius 1845. 2. 15-1937. 2. 5 が73年に来日している。ドルー Drew 神学校を卒業後、同教会のボルティモアの年會に教職試補として入会し、日本への宣教師に任命された人物である。

1874（明治4）年10月28日、横浜に入港したスクーンメイカーは東京地区の宣教を命ぜられ、直ちに女子学校の開設に着手した。ソーパーの紹介により津田仙の協力を得て、同年11月16日、東京麻布新堀町にある津田家の隣家に女子の小学校を開校し、少数の女子生徒を集めて教育を開始した。翌年、芝三田に移って救世学校となり、さらに築地居留地内明石町10番地に2棟の校舎を新築して移転し、77年に海岸女学校と改称した。築地明石町の外国人居留地内にソーパーが購入していた土地に建てられたものである。寄宿制のこの学校の開校当初の生徒数は32名であった。

その後、徐々に婦人宣教師らによって教授陣が強化され、日曜日にはソーパーが礼拝説教を行った¹⁸⁾。校長のスクーンメイカーは、ここで宗教・英語はもちろん裁縫・料理から天文学に至るまで一手に教えた。彼女の努力が実り、76年4月には教え子の内からメソジスト監督教会として日本初の少女受洗者4名を出した。海岸女学校の校長をつとめるかたわら、日曜学校、婦人会などを開いて宣教に従事したが、健康を害して79年に帰国した¹⁹⁾。（79年、校舎が火災に遭って一時銀座3丁目の原女学校跡に移った。）

日本人教師としては、本多庸一の同郷の後輩にあたる手塚新が、75年春から海岸女学校の前身・女子小学校の教師となり、スクーンメイカーの日本語教師を兼ねた。そのほか、郷里の名古屋で和漢その他の教育を受け、愛知県立女子師範学校の

教師となった稲垣寿恵子が、78年に東京へ出て築地の海岸女学校で教鞭をとった。彼女はのちに女子教育家、社会事業家となった人物である。

江戸時代唯一の海外への門戸であった長崎では、活水学院の前身が誕生する。

長崎に赴任した美以教会牧師デヴィソンは、出島22番に本部を置き、宣教活動を開始した。76年には教会が出来、彼は女子教育に専門にたずさわる婦人宣教師の派遣をアメリカ・メソジスト監督教会本部に依頼した。婦人宣教会は、この要請に応じて、教育専門の宣教師としてラッセル Elizabeth Russell 1836. 10. 9-1928. 9. 6 を、福音奉仕活動の宣教師としてギール Jean M. Gheer 1846. 11. 3-1910 を派遣した。

ラッセルはオハイオ州ケイジズ市に生まれ、6人の子どものうち長女であった。1歳のときに一家はウェストバージニアのウェスト・リバーティに移った。彼女の教育は4歳から始められた。その地方には公立小学校がなく、家庭教師によるか、1年に3ヵ月ほど開く短期学校に通学するかしかなく、彼女は短期学校に学んだ。8歳のとき、一家はホイーリングに転住した後、南米イーリングに移ったので2つの女学校に通った。その後、1857年、ペンシルベニア州ワシントン女学校に入学し、2年後卒業した。さらに個人教師についてラテン語とドイツ語を学んだ。社会人としてはバージニア州内で約20年間、教育にたずさわった。ホイーリングの公立学校に2年、家庭教師を1年、それからカンバーランドの学校経営を数年、その後、カンバーランドの公立女学校小学部に2年、ついでピーモントの公立女学校につとめた。その女学校は年に5ヵ月間開かれ、残り7ヵ月は希望者に経営させる規定であったので、彼女はその経営にも6年を過ごし、さらにカイザー町に移って6年間学校教育を続けた。73年、この町に婦人宣教会の支部が彼女の発起によって結成され、彼女は地区の書記に、つづいてバージニア大会の書記になった。すでにワシントン女学校在学中、長老教会派遣宣教師の報告を聞き感銘を受け、海外伝道について関心を高めていた彼女は、79年5月、進んで海外派遣員を志願した。最初はインドのカ

ルカッタに予定されていたが、デヴィソンの長崎派遣の要請を知り、行き先を日本に変更した。婦人宣教会は彼女をシンシナティ派遣員とした。このとき、すでにラッセルは43歳であった。

ギールは、ペンシルバニア州プレア郡ベルウッド町に生まれ育ち、師範学校に学び、同州の各地で公立学校の教師をつとめた。この間、海外伝道の話聞き、召命を感じて献身の志を婦人宣教会に申し出、受理されてニューヨーク支部の派遣員となった²⁰⁾。

2女史は、1879(明治12)年11月22日、長崎に着き、デヴィソンに迎えられて、一週間ほど滞在した。まもなく、オランダ改革派教会宣教師館として建てられた平屋建ての家に移り、同年12月1日、エリザベス・ラッセルは、ギールの協力を得て長崎市東山手の地において学校を始めた。最初の生徒は23歳の女性・官梅能ただ1人であった。將軍家綱・綱吉時代の有名な漢学者・書家を先祖にもち、外人居留地となった東山手の管理の任に当たり貿易商リンガーとも交際があったといわれる人物を父にもつ娘であった。16番館で始められたこの女学校は、英語だけではなく、日本国民としての一般教養から女子の手芸、音楽教育にいたるまで教授すると告げていた。生徒は、翌年2月に鹿児島から3名、4月に長崎市内から4名が入学し、さらに7月末には総勢9名となり、以後、漸次増えていった²¹⁾。

7) アメリカ・メソジスト・プロテスタント教会同教会の婦人外国伝道会から派遣され、1880年9月23日に来日した宣教師ハリエット・G・ブリテン Brittan, Harriet Gertrude 1822. 6-97. 4. 30 は、横浜居留地48番に少数の子女を集め、同年10月28日、女学校を開校した。貧困な環境にある子女と欧亜混血児の救済を兼ねた設立であった。創立当初の生徒は、同教会が横浜のアメリカン・ミッション・ホームに資金を送り委託した児童生徒で、これを引き取って教育事業を開始した。これが、ブリテン女学校である。のちの横浜英和女学校、成美学園である²²⁾。

アメリカ・メソジスト・プロテスタント教会

Methodist Protestant Church とは、1830年アメリカ・メソジスト監督教会から教会政治上の問題で分離した教派で、信条においては母教会とほぼ同じである。監督教会において立法、行政、審判の諸権がすべて教職の支配下にあり、監督が専制権を有することに抗議して、信徒の代議員を認めるよう改革を主張したが退けられた結果、政治改革者の代表が1828年ボルチモア市においてアソシエイトド Associated メソジスト教会という名称で分離教会を設立した。ついで、30年の総会でメソジスト・プロテスタント教会と改称した。

イギリス生まれで、幼年期にアメリカに移住してブルックリンに居住したブリテンは、10歳頃に3階から転落して大けがをし、18歳まで病床にあった。その後、健康を取り戻したものの歩行は困難であった。肉体的負い目をもちながらも海外伝道に燃え、1854年、32歳のときにアメリカ聖公会から派遣されてアフリカ伝道に旅立った。熱病に悩まされて帰国したが、61年に結成されたアメリカ婦人連合会伝道会の推薦で宣教師としてインドのカルカッタに赴き、17年間にわたって、不当な扱いを受けていたインド婦人の救済と教育に努力した。また、本国に対して看護婦養成・女子医学教育への関心を訴えた。

しばらく帰国していたが、80年、インドの親友の推薦およびその死により、アメリカ・メソジスト・プロテスタント教会からの要請に応じて、5年間の契約で、横浜に渡来した。ときに58歳、すでにベテラン宣教師であった。日本語が不自由な彼女を助けたのがフェリス出身の原田良子であり、通訳をし、また幼稚園の教師として働いた。ミッション・ホームに委託されていた生徒の一人である根頭えい子も通訳兼助手となった。教派を異にするバラ夫妻が建物を貸したほか、児童生徒を集めることに協力した²³⁾。

8) アメリカン・ボード

1873年、アメリカン・ボード最初の日本派遣婦人宣教師タルカットとダッドリーが来日し、神戸在に小家塾を開いた。神戸女学院の源流である。

コネティカット州ロックヴィル生まれのタル

カット Talcott, Eliza 1836. 5. 22-1911. 11. 1 は、ミス・サラ・ポーター女学校、ニューブリテン州立師範学校を卒業し、数年の教職経験をもっていた。10年間、病弱のお婆の看護に当たっていたが、後に海外伝道を志した。ダッドリー Dudley, Julia Elizabeth 1840. 12. 5-1906. 7. 12 は、イリノイ州ネバービルに生まれ、ロックフォード・セミネリーを卒業して教職にあったが、看病していた母の死後、日本伝道を志した。来日後さっそく彼女らは、日本女性への伝道と教育のため、神戸花隈村に私塾・神戸ホームを開いた。

その後、75年10月12日、日米双方の寄付により寄宿学校が落成して拡充され、タルカットが初代校長に就任した。この日をもって神戸女学院の創立記念日とされる。翌年、バロース Barrows, Martha Jane 1841. 7. 26-1925. 3. 13 が来日した。ヴァーモント州ミドルベリに生まれ、マウントホリヨーク大学に学んだ彼女は、従姉のダッドリーを助けて女学校の創立に協力した。その後、この学校は、79年にクラークソンがあとを継ぎ、神戸英和女学校と改称した²⁴⁾。前者3名の婦人宣教師たちは、翌年10月、この学校から独立して、婦人伝道者のために神戸女子伝道学校を開校した。現在の聖和大学である。

関西最初のキリスト教主義女学校である神戸英和女学校設立の背後には、旧三田藩主・九鬼隆義 1837-91. 1 の援助があった。同校の創立は九鬼の要請によるものといわれ、彼は物心ともに大きな助力をした。綾部藩主隆都の3男として生まれ、23歳にして摂津国三田藩主の嗣子に迎えられた九鬼は、第23代藩主となり、版籍奉還後は三田知事となった。福沢諭吉と親交があった人物でもある。知事を免ぜられた後は、神戸に出て外国薬の商会を興し、また広大な土地を購入して巨富を得た。有馬に保養中のアメリカ人宣教師デイヴィスを訪問して感化を受け、宣教医ペリーを主治医として神戸在住の宣教師たちと交わっていた。

9) アメリカ婦人一致外国伝道協会 (WUMS)

前々稿に記したように、この協会によって、開港場の横浜ではアメリカン・ミッション・ホーム

が開設されていた。当初は、混血児の救済と教育を目的としていた。ジェイムズ・バラが、横浜の居留地に混血児が多数放置されていることを問題として、婦人宣教師がその保護と教育に乗り出すべきことをアメリカの教会・知人に訴え、婦人一致外国伝道協会に新事業着手の契機を提供したものであった²⁵⁾。

校舎が手狭になったため、72年10月、山手212番に土地を購入して移転し、同年12月、校名は日本婦女英学校と変更された。

静岡から出てきた旧幕府の大儒で、しかも英国で1年半にわたり英学を修めてきた中村正直は、アメリカン・ミッション・ホームを訪ねて3人の婦人宣教師の使命感と働きを見聞するにおよび、自分の妻と娘2人を入学させている。かねてから英国の文明制度の根本がキリスト教精神にあると看破していた彼は、日本においてもキリスト教によって立ち遅れた女子教育を推進しようとしていた3女史に感動し、進んで学校紹介と宣伝の文章を書いた。当初、英国人の娘2人が入学し、やがて、長野県北山権吉の娘2人、福沢諭吉の娘3人と姪、井上馨の娘2人と、徐々に開明的な指導者層にも学校の存在が認められ、子女がおくられるようになった²⁶⁾。

静岡の伝習所の教師として来日したクラーク、E. W. は、その著書『日本における生活と冒険』(“Life and Adventure in Japan”, ニューヨーク, 1881)のなかで、最も興味深く、そして成果をあげている宣教活動の具体例としてミッション・ホームをとりあげ、「日本の地に真にクリスチャンホームの安らぎと上品さのすべてを見ることは楽しいことである」と校舎の挿絵入りで紹介している。また、グリフィスの姉で、東京女学校の英語教師であったマーガレット・グリフィスも、その日記のなかで「彼女たちはすばらしい家をもっており、16人の子供が楽しそうにしていた。校舎の中で祈りや歌を英語と日本語で行っていた。午後には校舎の中で日曜学校をしていた(1873年9月21日)²⁷⁾」と記している。

日本婦女英学校は、1875年9月、共立女学校と改称された。改称の理由は、米国婦人一致外国伝

道協会が、その名の示すように、特定の教派に属さず、超教派の連合・一致(Union, 共立)をめざすミッション・ボードであることによるものであった。同年10月、ブラインが病気のため帰国したが、その後を受けて、クロスビーが第2代総理に就任、ピアソンは引き続き校長として学校の発展につとめた²⁸⁾。

II カトリック

カトリックでも、ヨーロッパで女子教育に長い伝統をもつ女子修道会が日本に進出し、それぞれの信条に基づいて日本の女子教育を開始した。その事業は、ローマ・カトリック教会の宣教活動の一環としてあった。

1) サン・モール会(幼きイエズスの修道会)

前々稿で紹介したように、1871年、5人のサンモール会の修道女がシンガポールの修道院から横浜に渡来した。シンガポールのサンモール会修道院長メール・セン・マチルドが、日本代牧教区長プティジャン司教から来日を促す書簡を受け取り、パリのフォドアス総長に許可を得て渡来した。マチルドは、20年にわたり、マレー半島で慈善事業・教育事業にたずさわり、サンモール会のシンガポールとベナンの修道院の実質的な創立者であった。彼女たちは、一人のアイルランド人を除いて、みなフランス女性であり、修道女として日本の土を踏んだ最初の人たちであった。

マチルドたちは、孤児・捨て子・困窮者の子どもを收容し、養育し、教育した。この無料施設は、いつしか「仁慈堂」と呼ばれた。女子教育、とくに宗教教育をすることが、サンモール会本来の目的であった。マチルドは、来日の翌年、東京に寄宿学校・孤児院・病院などの計画をたて土地を求めたが得られず、横浜の隣接地(山手88番地)に土地を求めて、建物の建設に着手した。外国人子女の教育にあたるサンモール・スクールと、貧困児童の教育にあたる董女学院の設立である。1874年、董女学校は定員40名で始められたが、修道女たちの献身的な活動により、次第に收容児童が増加していった²⁹⁾。

この修道会は、翌年、東京築地新栄町に、新栄女子学院と築地語学校を開設して、本格的な女子教育を開始した。前者は社会事業と孤児の小学校を経営し、後者は上流家庭の女子に英・仏語、国文、書道、文芸を教授した³⁰⁾。

1876年、ローマの布教聖省は、日本代牧区を二つに分割し、プティジャン司教に南緯教区を担当させ、北緯教区長に新たにオズーフ神父を任命、司教とした。これを機に、プティジャンは、フランスの幼きイエズス修道会の創立者であり初代の総長メール・アンティエに書簡を送って、同会修道女の来日を促した。77年5月、ショファイユを出発した4名の修道女は、マルセイユから船出して50日目に長崎へ到着、さらに船旅を続け神戸に上陸した。彼女たちは、長旅の疲れをいやすまもなく、さっそく孤児たちの世話を開始している。同年10月15日、プティジャン司教によって祝別されて、センタンファンズと名づけられた。神戸女子教育院の前身である。神戸における児童保護施設の最初である。年末には在籍児童は56名におよんだが、伝染病の感染に苦しめられた³¹⁾。

2) シャルトル聖パウロ修道女会

ローマ・カトリック初代北日本教区長オズーフ司教の招きに応え、フランスのシャルトルに本部をおく聖パウロ修道女会は、修道女を日本に送ることを決定した。その第一陣として、3人のフランス人修道女が函館に到着した。このうち、メール・マリー・オウグストは初代の聖パウロ会日本管区長に就任、この地を管区本部として、ただちに教育と社会事業を開始した³²⁾。

1878年5月に来日したシャルトル聖パウロ修道女会は、日を経ずして函館に女子のための学校を開設した。小学校に類する各種学校として、ル・ノエル・ド・グルスイ Le Noel de Groussy, Benjamin 1821-84 によって設立された。仏蘭西女学校と称されたこの学校は、今日の函館白百合学園につながっている。

Ⅲ ロシア正教

ニコライにより76年9月、東京都千代田区神田

駿河台に正教女子神学校が創立された。また、五十嵐グミアンが函館において伝道のかたわら伝教者の子女を教育していた。はじめ7、8名であった生徒が、次第に多くなったため、74年にニコライが函館を訪れた折に校舎を増築し、本格的な教育を開始した。これが正教女学校である。男女を区別し、女学校には女性教師の道家アンナ、四戸マリアなどが仙台教会から招かれた³³⁾。

アメリカでは、ほとんどの婦人伝道局が南北戦争後に設立された。伝道局が積極的に独身の婦人宣教師を支援し始めると、増加しつつあった独身職業婦人層がこれに応じ、みずからの職業として「婦人宣教師」を選択するようになった。志願した女性たちは、上記の幾人かの例にもうかがえるように、比較的教育程度の高い中流の白人女性であった³⁴⁾。彼女たちの経歴に出てくる「アカデミー」または「セミナー」と呼ばれる私立学校は、およそ1830年代から1860年代まで全盛をきわめたアメリカの女子中等教育機関である。中流女性の多くは小学校を終えると、家を出てセミナーの近くに下宿して勉強した³⁵⁾。

教育事業は、婦人宣教師の活動のなかで、最も一般的かつ重要なものであった。女子のための寄宿学校の経営はその中核であったが、ほかにも彼女たちは、通いの学校、小学校、幼稚園（これらは共学の場合もあった）を経営した。彼女らは、日本における男尊女卑の強い風潮のなかで、女子教育の重要性を確信し、使命観に燃えて仕事をした。

アメリカで婦人伝道局が設立され、婦人宣教師が積極的に送られるようになったとき、日本は開国に続く政権交代期を迎えており、封建的社会秩序・階層序列が弛み、組み換えられる時期にあっていた。基本的な国家体制の整備に忙しく、近代的女子教育、女性像の創出にまで手のまわらない日本政府が、多くの場合、婦人宣教師の女子教育事業を支援したことは、婦人宣教師の草創期の仕事の成功にとって大きな力となった。婦人宣教師の学校に学んだ日本女性の大半は、士族、裕福な商家、裕福な農家といった「中流の上」の階

層の出身者であった。西欧文化の吸収と自己研鑽に積極的な、真面目で教え易い少女たちに囲まれた婦人宣教師は、そのさまざまな困難にもかかわらず、比較的容易に仕事に着手し、それを拡大・発展させることが出来たのである³⁶⁾。

彼女らが日本の女子教育に果たした貢献は偉大であったが、小檜山ルイ氏によれば、本国では必ずしも有名であったわけではなかった。

フェリス女学院の創立者メアリ・E・キダー、女子学院のジュリア・カロザースやマリア・トゥルー、横浜共立学園のジュリア・クロスビーとルイズ・ピアソンとメアリ・ブライン、青山学院の前身である海岸女学校のドラ・スクーンメーカー、北星学園のサラ・スミス、活水学院のエリザベス・ラッセルとジェニー・ギール等、日本で女学校を創立した婦人宣教師たちは、その存在がアメリカではほとんど知られていない。唯一の例外と言えるのは、神戸女学院のエルザ・タルカットと、創立者ではないが同志社で長く教えたメアリ・F・デントンという、アメリカン・ボードの婦人宣教師である³⁷⁾。

彼女たちの背景には、近代化、南北戦争を通じて、キリスト教会を通じての女性の社会的アクティビズムを生み出した19世紀アメリカの歴史の流れがあり、より具体的には婦人伝道局という都会の有閑中流女性たちの戦闘的無償奉仕活動があり、さらにその背後には、アメリカ全国津々浦々の町村において、敬虔で従順で純潔で家庭的な女性として地道に女性に与えられた義務を果たそうとする一般中流女性のささやかな献金があった。婦人宣教師は、こうした無数のアメリカの女性たちの代表として、当時のアメリカの女性独特の文化の力によって、海外に送り出されたのである。彼女たちの多くは、慎ましい信仰深い地方の中流の家庭に育ち、当時の女性としては人並み以上の教育を受け、教師として自活しながら、より広い地平に活躍の場を求める、上昇指向の強い女性たちであった³⁸⁾。

広い世界を活躍の舞台とする婦人宣教師と女権論とは必ずしも無縁ではなかった。エネルギーに溢れた彼女たちは、当時の女性に許容された狭い

領域を打破しようとする覇気に富み、それが海を渡るエネルギーに置換されたのである。なお、日本に来る場合、1869年の大陸横断鉄道の完成後は、サンフランシスコから太平洋ルートを使うのが一般的になっていた³⁹⁾。

明治維新以降、アメリカより続々と来日した婦人宣教師は、卓越した特殊な個人というより、当時のアメリカの中流女性一般の生活文化の代表者であり、尖兵であった。彼女たちは十字架のキリストが象徴する愛と自己犠牲を旗印として、日本のキリスト教化の一端を担った。男性の宣教師が聖書の翻訳や神学教育に重点をおいて伝道にあたったのに対して、婦人宣教師はキリスト教徒たるものの生活のあるべき姿を極めて具体的に日本人に示そうとした。彼女たちは、男女の神聖なる愛による結婚、クリスチャン・ホームの光としての女性の役割、とくにそのホームにおける育児をつうじての国家への貢献について語った。重大な任務を負うに足る教育を女性自身が備えるべきこと、愛ある結婚が得られないときには教師や看護婦として社会に「役に立つ」人材となれるだけの教育・訓練を積むべきことを強調した。施しの精神を養い、余暇にはできるだけ慈善活動に励むことを教えた。主として寄宿学校という疑似的クリスチャン・ホームを使って、これらのクリスチャンの女性のライフスタイル全般を若い日本の女性に体験的に会得させようとした。彼女らの伝道のありようは文明伝播的であった⁴⁰⁾。

明治の初め、時代の先端をいくものは西洋近代文化であった。それは大にしては政治制度・経済機構・教育行政などもそうであるが、しかしそればかりでなく、家庭の問題、婦人の地位、食事の栄養、衛生のことといった日常茶飯事にいたるまで、西洋のものは日本の文明開化を促すものとして歓迎された。教会には外人宣教師がいてそうした日常的なことについて指導してくれる。外国ミッションはまた、そこをねらって学塾をたてる。すなわちミッション・スクールは、そうした小規模な家塾から発展していくのである⁴¹⁾。

3 日本人によるキリスト教主義女学校の設立

日本人クリスチャンによる女学校もまた、すでにこの時期に幾つか生まれていった。

同志社女学校は、1877（明治10）年4月21日に設立された同志社分校女紅場を前身としている。京都御苑内のデイヴィス邸の一部を仮校舎として創設された。設立者は新島襄であるが、デイヴィスがキリスト教主義女学校の必要をアメリカン・ボードに訴えて女教師の派遣を求め、山本覚馬が協力したのが始まりである。

女学校設立へといざなったのは同業者であるデイヴィスの牽引力によるところが大きい。同志社に女学校を設けるべきであるという彼の企てに、新島が賛成して尽力したというのが事実のようである。山本は維新当時から女子教育の必要を説いていた。デイヴィスはまた、神戸で73年以来タルカット、ダッドリーによる女性のための私塾神戸ホーム、寄宿学校の経営を身近にいて支援した経験をもっていた。彼は同志社女学校発足後も女学校についての巨細をアメリカン・ボードに報告し、その拡充のための物心両面の援助を求め続けた⁴²⁾。

創立時から教師の中心として英学、万国史、地誌などを教えたのが、スタークウェザー Starkweather, Alice Jennette である。アメリカン・ボード婦人宣教師である彼女は、1849年、コネチカット州ハートフォードに生まれ、66年にハートフォード女子セミナーを卒業し、教師となった。デイヴィスの要請を受けて76年4月に来日した彼女は、デイヴィスの住む京都御苑内旧柳原前光邸に寄留して、さっそく女子教育に着手した。彼女は新島の妻・八重とともに邸内の一隅で同年10月15日から私塾を開き、数名の女子に英語などを教えたが、それがやがて学校に発展した。

同志社分校女紅場は、その学科内容が勲業授産よりも婦女子の才芸知識を開こうとするものであったため、77年9月に同志社女学校と改称された。ここで教育は、裁縫たちぬいと割烹りやうりがあるほかは、基本的にリベラル・アーツ・エデュケーションであり、理系科目に加えて音楽と体操をおくなど全

人教育が意図されている⁴³⁾。

その後、生徒数が次第に増加するにともない、御苑内の旧公卿屋敷では手狭になり、翌78年1月、御苑の北隣にある旧二条関白邸跡に地所を求めた。婦人伝道会 Woman's Board Mission の援助などによって、常盤井殿町に校舎を新築することができた。新校舎の完成をまって移転し、同年9月16日、新学年の開業式が挙行された。山本覚馬と八重の母である山本佐久が、寄宿舎の舎監をつとめた。

スタークウェザーに続いて、パーミリー Par-melee, Harriet Frances 1852. 5. 13-1933. 1. 8 が77年10月に来日した。英語教師として同志社女学校に迎えられたが、外務省から京都府下での居住を許可されなかった。府からの雇入れ不許可の回答は、同志社経営に関して、アメリカ人による支配の嫌疑を政府が有していたことをうかがわせるものである。結局、彼女は約一年間神戸で過ごした後、赴任し、英語のほか手芸を教えた。同志社女学校第1回卒業の宮川経輝（彼の卒業演説は「女子教育論」）、加藤勇次郎らも教鞭をとった。

『同志社女学校規則書』（80年）によれば、定員50名、邦語科（3年）および英書科（4年）の2部を置き、別に小学校卒業者のために2年の予備課程を設けた。学年の始まりは9月であった。82年6月、邦語科5名を最初の卒業生として送り出した⁴⁴⁾。

大阪では、梅花女学校が設立された。

1877（明治10）年10月、梅本町公会（大阪教会）と浪花公会の親睦会の席上、両教会が協力してキリスト教女学校設立を図ることとなった。土佐堀町の住宅を借りて、78年1月7日、開校式が挙行され、両教会の名を合わせて梅花女学校と名づけられた。最初の入学生は15名であった。創立者として名をとどめているのは、沢山保羅、上代知新、成瀬仁蔵、前神醇一、小泉敦、古木虎三郎、レヴィット、H. H., アダムズ、A. H., スティーヴンス、F., カーティス、W. W., デフォレスト、J. K. H. らである。初代校主は小泉があたった。

開校式において、沢山は、他者のために献身したイエスに倣う愛の精神をもつことの大切さを説

いた。開校に際して同校の教師となった成瀬は、この学校を「愛なる女学校」として、神の愛にふれて女性の愛を高める場であると述べた。

創設を主導した沢山保羅 1852. 5. 10-1887. 3. 27 は、山口県吉敷に毛利家の諸士沢山源之丞といわの長男として生まれ、成瀬とは同村の出身であった。本名を馬之進といい、つとに俊才の誉れ高く、年少時には長州藩の支藩に仕える身として幕軍と戦ったこともあった（1866年四境戦争＜第2次征長＞に良城隊鼓手として出陣）。陽明学を学んでいたが、70年、洋学修得のため神戸に出、宣教師グリーンの知遇を得て英語を学び、家庭礼拝にも出席した。グリーンへの勧めと周旋により72年に渡米し、イリノイ州エヴァンストンのノース・ウェスタン大学予科に入学した。同年11月、エヴァンストン第一会衆派教会で洗礼を受けた。在米中、祖国の霊的救済に目覚め、宣教師リーヴィットの影響を受けて伝道者としての使命観を深めた。76年8月に帰国すると、中央政府からの高給の仕官の勧めを固辞して、大阪の小さな教会で自給独立の伝道に従事する道を選択した。翌年1月、浪花教会の設立とともに按手札を受けて同教会の初代牧師となった。

のちに日本女子大学の創設者として有名になる成瀬仁蔵 1858. 8. 2-1919. 3. 4 は周防国吉敷郡（山口県）に生まれ、山口県教員養成所を76年に卒業し小学校訓導となった。翌年、帰郷した同郷の先輩・沢山を通してキリスト教に触れ、彼に導かれて大阪に出、77年11月、浪花公会で沢山から受洗していた⁴⁵⁾。

梅花女学校は、創設当初から、自給学校として外国ミッションの経済的援助を受けず、教会によって支えられて運営された。そのため、再三経営の危機に見舞われながらも、教会・信徒・女学校委員の援助によって、クリスチャン・スクールとしての道を歩んだ。小泉に続いて田村初太郎が校長に就任した(79-83)。1879年春、梅花女学校に着任したアメリカ婦人一致外国伝道協会宣教師コルビー Colby, Abby Maria 1847. 7. 9.-1917. 1. 5 は、ニューハンプシャー州マンチェスターに生まれ、ボストンで看護婦の資格を取得した後に来

日し、梅花女学校創立後の最初の宣教師として、不安定な草創期を支えた。

既述の通り、A 6 番女学校の生徒の一部は B 6 番女学校に移ったが、カラゾルス夫人は生徒の大半と共に、夫の弟子が開設した原女学校に転じた。原女学校とは、カラゾルスの門下生である原胤昭 1853. 3. 11-1942. 2. 23 が、ミッションの協力を受けずに、76年5月、東京銀座に開設した学校である。わが国における最初の日本人経営のキリスト教系女学校である。

佐久間健二郎・とき子の3男として江戸日本橋茅場町に生まれた彼は、町方与力200石の原家を継いだ。原は横浜修文館、築地英学校などに学び、カラゾルスから74年に受洗し、東京第一長老教会に属していた。十字屋を創業して日本基督一致教会系のキリスト教書（聖書分冊や賛美歌など）の出版販売を行っていた。日本で初めてサンタクロースを登場させたクリスマスを挙行政したことで有名な人物である。長老教会に属すカラゾルス、C. は、無教会主義公会設立に際して同調せず、東京に第一長老教会を設立して公会主義挫折の一原因ともなったが、築地バンドと呼ばれる一団を生み、原女学校の源流となった。

原女学校は、カラゾルス夫人が広島に去った後、トゥルー、M. T. 夫人を教師に迎えて発展を期したが、財政上の理由で経営難に陥り、80年に廃校となった。生徒の多くは、トゥルーとともに新栄女学校に移った。結局、原女学校は明治9年から13年までの短い期間しか存続しなかった。

横浜の共立女学校に学んだ桜井ちか 1855. 5. 19-1928. 12. 19 が、原女学校開校と同じ76年に桜井女学校を創設している。

徳川家御用達・平野与十郎の長女として東京日本橋に生まれた彼女（名は、後年、近子、智嘉とも書いた）は、18歳で海軍士官の桜井昭恵と結婚、女塾・芳英社で英語を学ぶうちにキリスト教に触れた。新栄教会に出席して、1874年タムソンから受洗、キリスト教主義による女子教育の必要を痛感するようになった。短期間ではあったが、共立女学校の寄宿舎に入って、とくに英語と割烹を学んだ（当時、会費が1か月3円、土曜日以外は毎

日洋食であった）。東京麴町中六番町に民家を借り、1876（明治9）年10月24日、英女学家塾として認可を受けて、桜井女学校を発足させた。家塾の創設につづいて、小学校、貧学校をも開設した。

桜井女学校は、ミッション資金によらない日本人経営のキリスト教主義学校で、79年に高等小学科、80年には日本で最初の私立幼稚園を付設、キリスト教幼稚園の先駆をなした。翌年7月、夫が海軍を辞して牧師として函館へ赴任する際、ちかが夫に従ったため、その後を受けて矢嶋楯子が校長代理に就任した。その際、学校の経営はアメリカ長老教会フィラデルフィア婦人伝道局の手にゆだねられることとなった。この学校は、女子学院の源流の一つをなす⁴⁶⁾。

平塚益徳は、欧化主義時代のキリスト教主義学校を以下の3類型に分類している。

第1の型は、純粹の、いわゆるミッション・スクールである。外国ミッションの経営になり、校長ならびに幹部には宣教師が主としてこれに当たり、教科内容は一般に程度が高く、英語が断然重視されていたものである。

第2の型は、その経営が日本人の手にあるか、または日本人がほとんど同格の地位をもってその経営に当たったものである。内外人の協力（もちろん、いわゆるミッション・スクールといえども日本人の協力は必要であった）を以て、その特色とする。したがって、校長ないし幹事職も日本人が就き、または必要に応じて外国人がこれに就けるといったもので、校風もミッション・スクールほど外国化していなかったものである。

第3の型は、ミッション・スクールの手を全く離れて、日本の教育を十分に顧慮しようとしたものである。多くの場合、教派を超越して清新なキリスト教的精神のもとに自由の気を忘れない教育を施そうとしたものである。

平塚博士は、フェリス和英女学校、神戸女学院、活水女学校を初めとして、多くの女学校が第1の型に属し、同志社女学校、梅花女学校などは第2の型、原女学校と桜井女学校などは第3の型の早期のもの、と分類している⁴⁷⁾。

前稿のとおり、キリスト教主義の学校の萌芽は宣教師の家塾に求められるのであるが、女子教育についても同様な発生プロセスがみとめられる。これらキリスト教系女学校が、高い教育水準を示し出したのは明治10年代以降のことである⁴⁸⁾。こうして始まったキリスト教徒による女子教育は、1880年代に入りますます隆盛し、その勢いをとどめることがなかった。

註

- 1) 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1990年（10版）、185頁
- 2) 同上、194頁 II. Ritterの書による統計表からの再引
- 3) 石附実『近代日本の海外留学史』中央公論社（中公文庫）、1992年、192-3頁
- 4) 同志社々史々料編集所『同志社九十年小史』同志社、昭和40年、242頁
平塚益徳（女子教育）「人物を中心とした女子教育史」平塚博士記念事業会編『平塚益徳著作集Ⅰ 日本教育史』教育開発研究所、1985年、137-142頁、167、184-5頁
- 5) 山住正己『日本教育小史』岩波書店（岩波新書）、1987年、71頁
- 6) キダーと彼女の教育活動、ミラーや周囲の人間関係に関しては、次の文献が詳しい。小楢山ルイ『アメリカ婦人宣教師—米日の背景とその影響』東京大学出版会、1992年、第四章「拠点：日本での仕事」五「結婚：メアリ・E・キダーにとっての「愛ある結婚」」、252-262頁
- 7) 横浜プロテスタント史研究会編『図説 横浜キリスト教文化史』有隣堂、1992年、36頁
- 8) 同上、40頁 その他の参考文献：山下秀煌編『フェリス和英女学校六十年史』1931年 フェリス女学院『フェリス女学院100年史』中央公論事業出版、1970年 同『フェリス女学院110年小史—1870-1980』、1982年 フェリス女学院編訳『キダー書簡集—日本最初の女子教育者の記録』教文館、1976年
- 9) 宇津恭子『才藻より、より深き魂に一相馬黒光・若き日の遍歴』日本YMCA 同盟出版部、1983年
- 10) 若松賤子・刊行委員会編『若松賤子—不滅の生涯』共栄社出版、1977年
山口玲子『とくと我を見たまえ—若松賤子の生涯』新

- 潮社, 1980年
- 271頁
- 11) 『女子学院八十年史』1951年 女子学院史編纂委員会編『女子学院の歴史』女子学院, 1985年 なお, この2つの学校の歴史と, それをめぐる人間関係に関しては, 次の文献がきわめて詳しい。小槍山ルイ 前掲書, 第四章二「開拓: A 六番女学校とB 番女学校」, 189-212頁
- 12) 平塚益徳「人物を中心とした女子教育史」, 前掲書, 206頁 伝記としては次の文献がある 久布白落実『矢島構子傳』1935年
- 13) 立教学院百年史編纂委員会編『立教学院百年史』, 立教学院, 1974年 立教女学院九十年史資料集編纂委員会編『立教女学院九十年史資料集』1967年 立教女学院『立教女学院百年小史』1977年 同『立教女学院百年史資料集』1978年
- 14) 平安女学院『平安女学院八十年史』1960年 同『平安女学院100年のあゆみ』1975年
- 15) プール学院YMCA編『POOLE 宗教活動の歴史』1965年
- 16) 高橋楯雄編『日本バプテスト史略 上』1923年
- 17) 小玉敏子「アンナH. キダーと駿台英和女学校」(関東学院『いんまぬえる』9) 1976年
- 18) 青山学院交友会女子短期大学部会(青山さゆり会)編『青山女学院史』青山女学院, 1973年
- 19) 青山学院編『青山学院九十年史』1965年 『青山女学院史』同上
- 20) 活水学院百年史編集委員会編『活水学院百年史』活水学院, 昭和55年, 19-20頁
- 21) 同上, 22-24頁
- 22) 成美学園『成美学園百年史』, 同『目で見る成美学園の100年』, 1980年
- 23) 『図説 横浜キリスト教文化史』前掲, 46頁
- 24) 神戸女学院百年史編集委員会編『神戸女学院百年史』2巻 1976, 81年
- 25) 『横浜共立学園六十年史』1933年, 7-9, 10-12頁
- 26) 太田愛人『明治キリスト教の流域 静岡バンドと幕臣たち』, 中央公論社, (中公文庫), 1992年, (三 御儒者の回心 中村正直), 45-47, 58頁
- 27) 碓井知鶴子「明治開花期におけるマーガレット・グリフュスの役割」『ザ・ヤトイ』思文閣出版, 1987年
- 28) 『図説 横浜キリスト教文化史』前掲, 43頁 『横浜共立学園六十年史』1933年
- 29) 田代菊雄『日本カトリック社会事業史研究』法律文化社, 1989年, 52-54頁
- 30) 平塚益徳「人物を中心とした女子教育史」, 前掲書,
- 31) 同上, 56-58頁
- 32) 平塚益徳「人物を中心とした女子教育史」, 前掲書, 272頁
- 33) 牛丸康夫『日本正教史』, 日本ハリストス正教会教団府主教庁, 1978年
中井終子『女子神学校・正教女学校出身者名簿』1940年 石川喜三郎『日本正教伝道誌』1901年
- 34) 小槍山ルイ 前掲書, 3, 20-21頁
- 35) 同上, 30頁
- 36) 同上, 267頁
- 37) 同上, 141頁
- 38) 同上, 181頁
- 39) 同上, 140, 158, 142-3頁
- 40) 同上, 265頁
- 41) 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』前掲, 174-5頁
- 42) 宮澤正典「新島襄と女子教育」, 同志社編『新島襄—近代日本の先覚者』見洋書房, 1993年, 86-88頁
- 43) 同上書, 93頁
- 44) 同志社々史々料編集所「同志社九十年小史」前掲, 242頁, 247-50頁 なお, 同『同志社百年史』1979年, 同志社女子中高編『同志社女子部の百年』1978年, J. D. Davis "Doshisha Girls School, 1876-1903"を参照
- 45) 梅花学園90年小史編集委員会編『梅花学園90年小史』1968年 仁科節『成瀬先生伝』1928年
- 46) 桜井淳司『桜井ちか小伝』1976年 平塚益徳「人物を中心とした女子教育史」前掲書, 203-4頁
- 47) 平塚益徳『日本基督教主義教育文化史』, 昭和12年, 前掲書所収, 61頁
- 48) 平塚益徳「人物を中心とした女子教育史」前掲書, 205-215頁